

2016 年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

第1問 現代社会分野・青年期分野

問1 正解は③。

- ③ 遺伝子は個人のパーソナリティの重要な要素だが、パーソナリティには遺伝的要因以外に環境的要因なども働く。確かにクローン人間の作成は倫理的に問題だが、「ある個人と完全に同じ性格の個人をもう一人作り出す」ことにはならない。
- ① 遺伝子組み換え技術は食料増産といった点で期待されるが、生態系や健康などに与える影響について懸念する声もある。
- ② 着床前診断の技術が進んだ結果、受精卵の段階で遺伝病のリスクなどを知ることができるようになった。しかしこの診断結果が出産するかどうかの判断材料にされるようになると、生きるに値する生命とそうでない生命を分ける優生思想にもつながってしまう。
- ④ 遺伝子診断は深刻な病気を未然に防ぐといった有益な用途にも使えるが、一步間違えると民間の保険や就職などの場面で、著しい不利益を強いられるといった事態も起こりうる。

問2 正解は⑥。

- ア ルソーについての記述。「第二の誕生」は、著書『エミール』においてルソーが示した概念。
- イ 新島襄についての記述。新島襄は幕末にアメリカに密航してキリスト教を学び、京都に同志社を創設した教育者。徳富蘇峰らを育てた。
- ウ 井上哲次郎についての記述。ここで言及されている「不敬事件」とは、内村鑑三が教育勅語への最敬礼を行わなかったとして問題にされた事件のこと。東京帝国大学の哲学教授だった井上は、これを厳しく批判し、内村のほか、キリスト者の植村正久らとも論争することとなった。

問3 正解は④。

- ④ 欲求不満になった際の対応には様々なものがあるが、この場合に努力や工夫によって問題を解決するのではなく、見当違いの八つ当たりをするのが**近道反応**である。
- ① 欲求不満の際に合理的に解決できず、近道反応も行われなければ、精神的に追い詰められてしまう。こうした場合に心を守るために自動的に作用するのが**防衛機制**である。この場合のように、本来の欲求とは異なるもので間に合わせる防衛機制は、「回避」

ではなく「代償」である。

- ② 「投射」ではなく「合理化」。
- ③ 「逃避」ではなく「抑圧」。

問4 正解は②。

- ② 人々はあらかじめ「課税前所得」をもっており、それを租税システムによって調整し、再分配が行われるというのが一般的なイメージだが、著者たちは、いわゆる「課税前所得」自体が租税システムによってつくられたものだと主張している。
- ① 第1文は正しいが、第2文がおかしい。課税前所得のすべてが政府のものという主張は資料文に見られない。
- ③ ①と同様、第2文がおかしい。所得を国民に分配すべきという主張は資料文に見られない。
- ④ 第1文は正しいが、第2文がおかしい。「市場での経済上の取引の結果」で公正さが決まるという主張は見られない。

問5 正解は②。

- ② 成功要因として**学歴**を挙げた者の割合は、いずれの国をとって見て低い。
- ① 「身分・家柄・親の地位」と「個人の才能」の割合の合計がいずれの国でも「個人の努力」の割合より小さいとあるが、これはイギリスやスウェーデンでは当てはまらない。
- ③ 確かに調査結果により、スウェーデン、アメリカ、ドイツの3か国においては、昇給・昇進は勤務年数よりも成績で決めるべきだと考える人が多いことが分かる。しかし成功要因を見ると、努力で変えられない「身分・家柄・親の地位」と「個人の才能」を挙げる人の合計が「個人の努力」を上げる人よりも少ないのは、3か国中ドイツ・アメリカの2国である。しかし『個人の努力』を重視する傾向があるとはいえ、『努力』と『成績』は必ずしも直結しないので、『努力の度合いが昇給・昇進に直結すべき』という部分が誤りである。
- ④ 「よって」から先の記述が誤り。日本で昇給・昇進について成績を重視すべきだと考える割合の合計は44.6%だが、勤務年数を重視すべきだと考える割合の合計は37.1%であり、前者のほうが高い。

問6 正解は③。

- ③ **アファーマティブ・アクション**は「積極的差別是正措置」と訳される概念で、単に形式的に平等に扱うだけでなく、構造的差別については被差別者を優遇するような措置が必要だという考え方に基づくものである。

- ① 差異の承認は多文化社会を築くための課題と言えるが、そのための措置をアファーマティブ・アクションというわけではない。
- ② 人種的マイノリティや女性については、「機会」の保障だけでは不十分であるとして登場してきた概念が、アファーマティブ・アクションである。
- ④ 構造的差別は「根絶不可能」ではない。

問7 正解は①。

ア ハンス・ヨナスはハンナ・アーレントとともにハイデガーのもとで学んだ哲学者。アーレントと同様にユダヤ人であったため、ナチスの時代にドイツを離れ、パレスチナなどを経てアメリカにわたり、アーレントの同僚としてニューヨークで哲学を教えた。近代の科学技術が人類に脅威をもたらしていることについて警鐘を鳴らした。

イ ラッセルは数学者・哲学者であると同時に、晩年まで大胆な反戦運動を展開した社会活動家としても知られる。核戦争の脅威に対して科学者の社会的責任を訴え、核廃絶を求めるラッセル・アインシュタイン宣言を発表し、バグウォッシュ会議のきっかけをつくった。

ウ シュヴァイツァーは医師・伝道師としてアフリカの奥地で献身的な医療活動を行うとともに、あらゆる生命への畏敬を訴えた。

問8 正解は④。

④ ボランティアは「意志」などを意味するラテン語を語源とし、徴集兵に対する志願兵を指す概念でもある。今日では一般に、対価なしに自発的に慈善活動などを行うことを指す。

- ① 高齢化と少子化が急速に進行している今日では、介護や子育てのための公的制度・サービスの充実化がますます切実になっている。
- ② 一般に「ボランティア元年」とは、阪神・淡路大震災が起こった1995年を指す。
- ③ レイチェル・カーソンではなく、マザー・テレサについての記述になっている。

問9 正解は⑥。

a コミュニタリアニズムは「共同体主義」とも訳される20世紀アメリカの思想潮流で、マッキンタイアやサンデルが代表。アメリカでは徹底した個人主義を特徴とする自由主義の伝統が支配的だが、コミュニタリアニズムは、自由主義の原理によっては、価値観の多様化する時代において相対主義を適切に批判することができなくなると考える。

b 「負荷なき自我」は現代アメリカを代表する哲学者サンデルがロールズを批判した際

に用いた概念。サンデルによれば、ロールズを代表とする自由主義の哲学は、時代や場所を超えた抽象的な個人を前提とし、そこから正義を論じようとしたが、そうした議論は成り立たないとされる。「超自我」は良心のありかを指すフロイトの用語。

- c サンデルらの立場によると、正義は人々のアイデンティティを構成する共同体の「共通善」を参照することで初めて成り立つ。「最高善」は、アリストテレスが目的それ自体となるものに対して与えた呼び名で、「幸福」を指している。

問 10 正解は⑤。

- ア 誤り。Aは「人生に運・不運はつきもの」であるとして、家庭環境により有利・不利が生じることは「不公平だとはどうも思えない」と述べている。
- イ 正しい。家庭環境によって不利が生じうることについて、Aは「気の毒」ではあるが、不公平だとは言えないと述べている。これに対してBはこうした事態が不公平であって、課税による是正が必要だと主張している。
- ウ 正しい。A・B最後の発言により、Aは格差の是正は民間の自発的活動に委ねるべきだと考え、Bはこれを国家的に行うべきだと考えていることが分かる。

第2問 源流思想

問 1 正解は⑥。

- a 「仁」が入る。仁とは内面における親愛の情であり、これが客観化されたものが「礼」である。
- b 「忠」が入る。仁の性格をより詳しく見ると、内面において自らを欺かない「忠」の側面と、他人への思いやりである「恕」の側面とに分けることができる。
- c 「君子」が入る。孔子において、徳を身につけ礼を体得した人物は「君子」と呼ばれ、これを目指して修養すべきだとされる。「真人」は荘子における理想の人物像。

問 2 正解は②。

- ア 正しい。シャリーアは『クルアーン』やムハンマドの言行から導かれたイスラーム法。豚肉を食べることや酒を飲むことなどは、シャリーアによって禁じられている。
- イ 正しい。イスラームにおいては世俗の生活についてもシャリーアによって詳細な規則が定められており、結婚や離婚、相続などについての規則などがこれに含まれる。
- ウ 誤り。シャリーアが神と人の関係および人間同士の関係を規定しているというのは正しいが、神に対する宗教的義務である五行に「瞑想」は含まれない。五行は、「信仰告白」「礼拝」「断食」「喜捨」「巡礼」の五つ。

問3 □ 13 □ 正解は②。

- ② ソクラテスは相対主義をしりぞけて普遍的な善や正義を追求し、またみずから正しいと思ったことは必ず実践せねばならないと考える哲学者であった。したがって、不正行為はいかなる場面（不当な判決に対する脱獄など）でも許されず、またその信念を実地に移すことで人々に範を示そうとした。
- ① ソクラテスは社会契約説に立っているわけではない。
- ③ ソクラテスにとっては正しいことを実践するのが大切なのであって、人々から正しいとみなされるかどうかは問題でない。
- ④ ソクラテスにおいてもっとも大切なことは、魂を配慮すること、つまりよく生きることである。国家に配慮することではない。

問4 □ 14 □ 正解は④。

- ④ 仏教においてはすべてが苦しみであるとされ、人間を構成する色・受・想・行・識の「五蘊」すべてが苦しみであるとされる。これが「八苦」の一つである「五蘊盛苦」である。八苦は、生・老・病・死の「四苦」に、「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五蘊盛苦」を加えたもの。
- ① 仏教では、「自分固有の本性」といったものは存在しないと考えられている。これが「無我」または「無自性」。第2文は正しい。
- ② 「死を目の当たりにすること」が「死ぬこと」であれば正しい。
- ③ 「三帰」とは、仏教における最も尊い三宝（仏・法・僧）に帰依すること。

問5 □ 15 □ 正解は②。

- ② 法律は万物の根源である自然から導かれたものだというのが資料文の趣旨。ストア派の標語「自然に従って生きよ」を想起するとよい。ここで言われている「自然」とはロゴスのこと。
- ① 自然は「善人の総意」によるのではなく、人間を超えた万物の根源である自然に由来する、とされている。
- ③ 資料文によると、法律は自然に従って定められるべきであり、また国家も国民も、自然の一部である。
- ④ 確かに知識と経験に裏づけられない悪法はありうるが、そうしたものは、自然に従わないからこそ生じてしまうものだとされている。

問6 正解は③。

- ③ 誤り。イスラエル人における十戒は、エジプトに移り住む際に与えられたのではなく、モーセに率いられてエジプトを脱出する際に神から与えられた。
- ① 正しい。律法を厳守すれば救われ、これを犯せば滅ぼされるとされる。
- ② 正しい。十戒は、最初の四箇条が「安息日を守れ」などの宗教的な規定であり、残りの六箇条が「父母を敬え」などの社会的・道徳的な規定となっている。
- ④ 正しい。神からの繁栄と祝福を約束されているのは選ばれた民としてのイスラエル人だけであるとされ、これが選民思想の背景となった。

問7 正解は①。

- ① いわゆる黄金律についての記述。
- ② イエスは、律法を形式的に遵守する律法主義を批判した。イエスによると、律法の精神は無差別で無償の愛であり、これを忘れて形式的遵守に傾くのは本末転倒であるとされる。
- ③ 「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」はイエスの言葉。
- ④ 神に感謝を捧げるための安息日は十戒の一つであり、イエスはこれらの律法を否定するわけではないが、安息日を守って人の命を犠牲にするようなことがあっては、神の愛という律法の精神に反するものだというのがイエスの立場である。

問8 正解は④。

- ④ 「万物はすべてひとしい」とは、荘子の万物斉同の教え。「絶対自由の境地に遊ぶ」とは、逍遥遊のこと。
- ① すべての根源に「一者」があり、これと合一することに幸福を見いだすのは、新プラトン主義の哲学者プロティノスの立場。
- ② 第1文は正しいが、第2文が誤り。アッラーは万物の創造者であり、太陽をも創造している。太陽などの具体的事物を崇拝する偶像崇拝は、イスラームにおいて厳しく禁じられている。
- ③ 世親（ヴァスバンドゥ）は大乗仏教における唯識思想の大成者。第1文は、ウパニシャッド哲学における梵我一如についての記述になっている。また第2文について、大乗仏教では必ずしも出家が必要とされない。

問9 正解は⑤。

- ア 第1文は正しいが、第2文の「個々の生に価値を認めることなく」が誤り。最終段落では、規範が「そこに住まう個々の生をも豊かにする」とある。

- イ 正しい。第三段落では、規範が「よき生や理想的な境地へ導く」とされている。
- ウ 正しい。「トーラー」とは律法のこと。ユダヤ教とキリスト教は、ともに絶対的なものにつながることによってよき生が実現すると考えられている。

第3問 日本思想

問1 正解は①。

- ① 記紀神話によれば、スサノヲは稲田の畦を破壊する畦放（あはなち）などの罪を犯し、**祓**いを科せられたとされる。
- ②④ スサノヲが犯した罪は反逆罪や自然界を荒らしたのではなく、農耕社会への妨害行為といえる「天つ罪」である。またヤマタノヲロチを退治したというのは、地上に追放された後のことである。
- ③ 死んだイザナミに会いに行ったのは、イザナミの夫イザナギである。

問2 正解は④。

- ④ **和辻哲郎**はその著書『日本倫理思想史』のなかで、記紀神話において、アマテラスは皇祖神とされる最高の神であるが、このアマテラスですら、**祀られる神**であると同時に**みずから祀る神**でもあるとされていることを指摘している。
- ① **天皇**を神聖にして侵すことのできない神的存在であるとするのは大日本帝国憲法である。忠孝一本は江戸時代の水戸学派が説いた。
- ② 人が死後に祖先神として子孫を見守ると説いたのは、民俗学者の**柳田国男**である。
- ③ 神は共同体の外部からやってくるもの（まればと）と説いたのは、柳田の弟子の**折口信夫**である。

問3 正解は⑦。

- a 『**金光明経**』が入る。奈良時代には仏教に**鎮護国家**の役割が期待され、国家安泰を説く『**法華経**』『**仁王経**』『**金光明経**』が特に重視された。これらは護国三部経とも呼ばれる。『**維摩経**』は聖徳太子が編纂したと伝えられる『**三経義疏**』において注釈されている「三経」の一つ（その他は『**法華経**』『**勝鬘経**』）。
- b 「**戒**」が入る。僧になるためには得度と受戒の儀式が必要であるが、奈良時代までの日本では、戒を授ける資格ある僧侶がおらず、国内では正式な受戒ができなかった。そこで唐の**鑑真**を招聘し、この制度を整えてもらった。「**三宝**」は仏教で帰依すべきとされる**仏・法・僧**のこと。
- c 「**空也**」が入る。空也は民衆に**浄土信仰**を広め、遺棄されていた死骸を火葬して弔うなどしたことから、**市聖**（いちのひじり）と呼ばれた。叡尊は鎌倉時代における律宗の僧侶。

問 4 23 正解は③。

- ③ 親鸞は、阿弥陀仏への信心による往生を説くとともに、その信心すらもが阿弥陀仏のはからいによるものだとする絶対他力を説いた。
- ① 悪人正機説は悪人こそが救済対象であるとするが、ここでいう「悪人」とは敢えて悪行を犯す者という意味ではなく、煩惱を捨てられず、またその自覚により苦しんでいる者のことを指す。
- ② 阿弥陀仏の姿を思い描くことによる救済は、平安末期の源信が説いた観想念仏の立場である。法然は称名念仏することに専念すべきだと説き、親鸞は信心だけでよいと説いた。
- ④ 信心は行の放棄によってではなく、阿弥陀仏のはからいによって得られる。

問 5 24 正解は①。

- ① 仏教は主君や親を捨ててでも自分の救いを目指そうとしており、まずは自分を捨てるべきだと主張している。
- ② 主君や親の往生をまず願うべきだといった主張は見られない。
- ③ 「楽欲」は捨てられるべきものとされている。
- ④ 罪とその贖いについては言及されていない。

問 6 25 正解は③。

- ③ 国学の大成者である本居宣長は、儒学が人間の自然な感情に対して否定的であったのに対し、ありのままの心(=真心)を肯定し、重視した。
- ① 宣長は、儒学が「感性」ではなく頭でものごとを考えてばかりいることを批判している。
- ② 儒学は嬉しいことと悲しいことを道理によって一律に定めているのではなく、そうした感情が否定されている、というのが宣長による儒学批判である。
- ④ 宣長は、「よくもあしくも生まれたるままの心」として真心を定義しており、善悪をはっきりと分ける儒学の見地を批判している。

問 7 26 正解は④。

- ④ 白樺派の代表的作家である武者小路実篤は、トルストイの影響を強く受け、理想主義的な見地から「新しき村」をつくった。
- ① 作家・哲学者として活躍した阿部次郎についての記述。
- ② 第二次世界大戦後の混乱期に『墮落論』で話題を呼び、無頼派とも言われた坂口安吾についての記述。

- ③ 戦前戦後の日本にあって、近代批評を確立したとされる**小林秀雄**についての記述。

問 8 正解は②。

- ア 不適切。西田幾多郎の説く**純粹経験**とは、**主客未分**の状態、つまり自分と対象が完全に融け合っている状態を指す。この例だと、合唱において自分の歌声が周囲とずれていることに気づき、注意しながら歌ったということなので、自分と対象が客体化され、主観と客観が分離してしまっている。
- イ 適切。自分が現に行なっているを「忘れて」それに夢中になるというのは、主客未分の**純粹経験**の境地である。
- ウ 不適切。自分を客観視しているので、対象に完全に没入する**純粹経験**とは異なる。

問 9 正解は②。

- ② 誤り。喜びを求める者が仏の道に背いているとあるが、リード文では、人の求める喜びが苦に転じることが指摘されているだけであって、喜びを求めること自体が仏の道に背いているとされているのではない。
- ① 正しい。第二段落の記述により、記紀神話にあっては、アマテラスその他の神の力に預かることを、人々が喜びとして捉えていたことが分かる。
- ③ 正しい。第四段落の記述には、近世において、自分だけが喜ぶことではなく、天の道理が実現したことに確かな喜びがあるとされたとある。
- ④ 正しい。第五段落の記述によると、近代日本においては、人格や個性の実現のうちに喜びが見いだされていたとされている。

第 4 問 西洋近代思想

問 1 正解は①。

- ① 誤り。著書名を『**デカメロン**』にすれば正しくなる。『**カンツォニエーレ**』は**ペトルカ**の作品。
- ② 正しい。**ダ・ヴィンチ**が確立した手法は遠近法。
- ③ 正しい。**アルベルティ**は建築、絵画、彫刻、数学、詩作など多方面で才能を発揮し、「万能人」と呼ばれた。
- ④ 正しい。**ダンテ**は詩人・政治家であり、ラテン語ではなくトスカーナ方言で『**神曲**』を書き、ルネサンスの先駆けとなった。

問 2 30 正解は③。

- ③ ガリレイは、有名なピサの斜塔での実験をもとに自由落下の法則を発見したと伝えられる。近代物理学を基礎づけたが、地動説を支持して宗教裁判にかけられた。
- ① 惑星が楕円軌道を描くことなどを発見したのはケプラー。
- ② 万有引力の法則を発見し、機械論的自然観を確立したのはニュートン。
- ④ 宇宙の無限性を説き、宗教裁判により火刑に処せられたのは、ジョルダーノ・ブルーノ。

問 3 31 正解は①。

- ① ウェーバーは、近代社会においては官僚制に象徴される合理性が社会の隅々まで徹底されるとして、そのなかで人々が次第に抑圧されていくと論じた。
- ② 道具的理性を批判した、フランクフルト学派のホルクハイマーやアドルノについての記述。
- ③ フランクフルト学派第二世代に位置づけられるハーバーマスの議論。システム合理性が徹底されていくことによって、「生活世界の植民地化」が進行すると論じた。
- ④ 資本主義において労働の疎外が進行すると論じたのはマルクス。

問 4 32 正解は②。

- ② カントの「コペルニクスの転回」についての正しい記述。「経験に先立って存する形式」とは、因果性を始めとするカテゴリーのこと。
- ① 「悟性」と「感性」を入れ替えると正しい記述になる。
- ③ 人間が認識できるのは現象だけであって、現象を超えた物自体については認識できないというのがカントの立場。
- ④ 経験を超越する事柄について認識できないというのは正しいが、それらの存在が否定されるというのは誤り。

問 5 33 正解は⑦。

- ア バークリーについての記述。バークリーによると、知覚されない存在というものは考えることもできないので、心の中で捉えられた事物と区別される外的な事物については否定した。
- イ ロックについての記述。ロックは、誰もが生まれながらに持つ生得観念という概念を大陸合理論の哲学者たちが前提していたのに対し、人間の心はもともと何も書かれていない「タブラ・ラサ（白紙）」の状態にあると論じた。
- ウ ヒュームについての記述。原因と結果における必然的つながりは経験によって認識

できるものではないことから、ヒュームは、因果性の観念は客観的なものではなく、習慣によって形成された信念にすぎないと論じた。

問6 34 正解は⑤。

- a 「永劫回帰」が入る。ニーチェは、キリスト教の考え方に反対し、人生には意味も目的もないとし、すべてが虚しく繰り返されると説いた。「輪廻転生」は古代インドの思想。
- b 「運命愛」が入る。あらかじめ与えられた意味も目的もない人生を全面的に肯定し、自らの生を謳歌すべきだというのが運命愛の思想。
- c 「力への意志」が入る。欲望は伝統的に否定されるべきものとみなされてきたが、ニーチェはむしろ自己実現を果たすために欠かせない力への意志であるとして、これを全面的に解放すべきだと論じた。

問7 35 正解は③。

- ③ 機械論的な発想を否定するベルクソンは、時間は空間のように分けられるものではないと考えた。時間は持続するものであり、そのなかで人は成長する。また、一瞬一瞬は絶えず新しいものであるから、その新しさの中で、人は芸術家として世界を創造するとされている。
- ① 第1文は正しいが、第2文が誤り。過去は変質しない。
- ② 第1文は正しいが、第2文が誤り。過去を未来に投影する予見はできないとされている。
- ④ 第1文は正しいが、第2文が誤り。ベルクソンが「芸術家」と言っているのは、一瞬一瞬を生きる人間のあり方であって、文字通りに芸術作品を制作する者という意味ではない。

問8 36 正解は⑤。

- ア 正しい。人間はモノとは違い、存在の意味を問うことができる。そのような存在の意味が開示される場という意味で、ハイデガーは、人間を「現存在（ダーザイン）」と呼んでいる。
- イ 誤り。サルトルの思想。
- ウ 正しい。人間はモノとは違い、周囲の様々なものと関わりつつ生きている。こうしたあり方をハイデガーは、世界内存在と呼んでいる。

問 9 37 正解は④。

- ④ ニュートンが確立した西洋近代科学においては時間が均質なものと考えられている。しかしこれとは異なる時間論がニーチェやベルクソンらによって展開されたことが紹介され、最終段落では、こうしたことを考えることで「自分の生き方を見直せるのではないか」と指摘されている。
- ① 第二段落末尾を元にした記述だが、こうした近代的・科学的な時間論とは異なる視点があるというのがリード文の趣旨。
- ② 第1文は正しいが、第2文が誤り。「科学的時間観」とは異なる時間観では、科学に基礎を求めるべきとはならない。
- ③ 「効率よく生きること」は西洋近代の時間論によって可能になったもので、リード文の趣旨は、これとは異なる時間論があるということ。